

着試験にはガラスアイオノマーセメント2種類、レジンセメント1種類、支台築造用レジンにはデュアルキュア型2種類を用いた。天然歯との辺縁封鎖性についてはサーマルサイクル負荷後、色素浸入試験を行い検討した。色素の浸入状態はマイクロスコープで観察し、窩壁あたりの色素浸入度から辺縁封鎖性を評価した。接着試験は樹脂包埋した牛歯エナメル質、象牙質を使用し仮封材除去後のセメント、支台築造用レジンと歯質との接着強さを測定した。

(結果及び考察) 辺縁封鎖性はNE>PA>DUの順となり、レジン系仮封材のDUより優れていた。試作仮封材の合着用セメント、支台築造用レジンの接着性に及ぼすユージノールの影響は認められなかった。

以上のことから仮封材としてPAを用いると今日使用されている仮封材と比較しても有意差は認められず、臨床応用は可能と考えられた。

7) 第一・二大臼歯の萌出と齲蝕リスク

○結城 昌子, 五十嵐 栄¹, 中川 正晴¹, 廣瀬 公治
(奥羽大・歯・口腔衛生, 山形県米沢歯科医師会¹)

(目的) 児童・生徒におけるう蝕罹患において、大臼歯の萌出時期の「早い」・「遅い」がそのリスク要因になりうるかを調べるための追跡調査を行った。

(調査対象) 調査対象は某市の平成15年度の中学3年生994名の歯科健康診断票を基に、大臼歯萌出の有無、DMFT指数の解析を行った。

(結果及び考察) 対象集団の中学1年(12歳)のDMF者率は68.8%、DMFT指数は2.35歯、中学3年(14歳)では76.1%、3.61歯であった。

第一大臼歯の萌出は、小学1年で70%を超え、4年で100%に達していた。また、第二大臼歯の萌出は小学4年頃から始まり、中学3年までに100%弱に達した。

小学1年で第一大臼歯が萌出している児童を萌出群、2年以降に萌出した児童を未萌出群として齲蝕罹患状況を比較した。萌出群では小学1～3年にDMF者率、DMFT指数が急激に増加したが、未萌出群では罹患が低かった。特に萌出・未萌出群のDMFT指数の差は小学1年が最小で0.3歯、

学年を追うごとに広がり、小学6年以降はさらに拡大し、中学3年で最大1.7歯に達した。

第二大臼歯の萌出を小4～6年、中1年、中2、3年萌出の3群に分け、萌出時期別に各群のDMFT指数の推移をみると、小6年時で各群の差が0.5～0.7歯に対し、中3年時には1.1～1.3歯に拡大し、第二大臼歯の早期萌出群に高齲蝕罹患性が認められた。また、中学3年時のDMFT指数に占める割合は、第一大臼歯が57%、第二大臼歯が17%で他歯種が26%であった。

第一大臼歯の萌出群と未萌出群のDMFT指数を6年まで追跡し、小6年以降は第二大臼歯の萌出時期を小学時と中学時群に分け、中3年時のDMFT指数を比較した。第一大臼歯の萌出・未萌出群とも、第二大臼歯の早期萌出(小学時)群が4.7歯、4.1歯と高く、第二大臼歯の萌出が遅い(中学時)群の3.3歯、2.3歯に比べ第二大臼歯の早期萌出群に高罹患性が認められた。

(結論) 学校の歯科保健管理を進める上で、小学生は小学1年時の第一大臼歯の萌出の有無、中学生では第二大臼歯の萌出の有無がう蝕ハイリスク者選別の有用な基準なることが示された。

8) 乳幼児歯科健康診査に関する地域歯科医師会との連携

○島村 和宏^{1,2}, 猪狩 道代¹, 加川千鶴世¹, 篠田 奈々¹
鈴木 厚子¹, 春山 博貴¹, 相澤 徳久¹, 鈴木 康生¹
瀬川 洋²

(奥羽大・歯・成長発育歯¹, 郡山歯科医師会健診検討委員会²)

(緒言) 歯学部附属病院は、三次医療機関として地域歯科医療機関の後方支援の役割を担っている。支援・連携の内容は、紹介患者の歯科診療はもとより地域の歯科保健活動に関わる内容も含まれる。これまで小児歯科で行ってきた地域歯科保健活動と、地域歯科医師会への支援ならびに連携して作成した『乳幼児歯科健診マニュアル』について概要を報告する。

(経過および考察) 地域歯科医師会、特に郡山歯科医師会とは年々連携を強め、当科で行ってきた歯科健康診査結果などを含め、研修会や講演会等で小児歯科領域の情報を提供してきた。しかし

歯科健康診査に関しては、健診を担う会員はもとより、健診時に行う保護者への情報提供の機会・時間は十分とはいえなかった。そのため保護者からの質問に対して、限られた情報の中で短時間に回答することは難しく、保健所を通しての問い合わせなどが報告されていた。

そこで郡山歯科医師会と連携し、母子歯科保健事業の充実と歯科健康診査の精度向上、保護者への説明内容の統一化を目的に、『乳幼児歯科健診マニュアル』を作成した。

健診の際の注意事項や判断基準の確認、今までの健診では重要視されていなかったインシデントに対する対応策や、健診時に保護者から受ける相談に対する具体的な回答例を提示したマニュアルは、有用であるとの回答が得られた。地域歯科保健事業における乳幼児歯科健診の意義は大きく、適正な診査をもとに、市民に対する正しい情報提供が必要と考えられた。

本学歯学部附属病院小児歯科に紹介された患者数は年々増加傾向にあり、これまで地域歯科医師会と連携を強化してきたことも要因と考えられた。

(結 語) 今後も地域のニーズに合わせて必要な情報を発信するとともに、関係機関との連携を密にして診療面においても地域歯科医療に貢献していきたいと考えている。

9) 平成18年度に実施したPBLチュートリアル の概要と評価

○清野 晃孝, 釜田 朗, 田代 俊男, 影山 勝保
鎌田 政善¹, 齋藤 高弘

(奥羽大・歯・診療科学, 歯科補綴)

(目 的) 自ら問題点を的確に抽出し、周囲と協調しながら変化に適切に対処できる人材の育成に教育の重点がおかれるようになった現在、PBLチュートリアルが歯学教育に急速に取り入れられている。そこで当講座では、平成17年度から臨床実習においてPBLチュートリアルを試み、今回は平成18年度の概要とアンケート結果を報告した。

(方 法) 平成18年度に実施したPBLの概要として、対象は5学年の91名であり、時間帯は月曜日から金曜日の午前10時から正午までの2時間

とした。1グループは6人から8人とし、各グループは週に1回、3週連続で、合計3回実施した。3回目には症例発表会を行い、アンケートを記載後、チュートリアルノートを提出させた。1グループに対してチューターは固定しなかった。

アンケートの内容は、実習方法、内容の質、内容の量、シナリオ、グループ学習の時間、グループ討議の時間、自習に費やした時間、グループ討議への参加程度、チューターの介入度、学習効果の10項目についてであり、それぞれ5段階の評価として記入してもらった。

(結果と考察) 平成18年度の第5学年を対象としたPBLチュートリアルは、学習効果について学生からよい評価を得た。シナリオは興味深く受け止められたが、自学自習の目的意識を高めることについては不十分であった。グループ討議の時間が1回2時間、3週連続のプログラムは、時間が長いとの意見も多く、学生の積極性に欠ける部分も伺えた。平成19年度は教務日程に組み込まれたPBLチュートリアル教育の構築がすでに図られており、特に臨床系講座の教員の取り組みと対応が直接、教育効果に影響するものとする。

10) 歯学部1年生におけるミラーテクニック体 験学習の有用性

—平成17年度および平成18年度の比較—

○田辺 理彦, 東田 大輔, 秋葉 祐輔, 笹原 麻美
中島 大誠, 森下 浩江, 佐藤 穩子, 今井 啓全
佐々木重夫, 天野 義和

(奥羽大・歯・歯科保存)

(緒 言) 我々は奥羽大学歯学部1年生の附属病院体験学習の中で将来歯科医師になるための自覚と認識を高めさせる目的で日常生活において慣れ親しんでいる鏡に関連したミラーテクニックの体験学習を行ってきた。今回は平成17年度および平成18年度の比較した。

(方 法) 本学歯学部1年生(平成17年度:91名, 平成18年度:89名)を対象に総合歯科第1診療室医局および診療室において行った。学習内容は①体験学習前質問紙調査(プレアンケート:3項目)。②鏡の特性と歯科診療におけるミラーテクニックの意義に関する講義(術者の診療姿勢や